國學院大學学術情報リポジトリ

「神道」はどう翻訳されているか：神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成：21世紀COEプログラム

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學21世紀COEプログラム 公開日: 2024-06-22 キーワード (Ja): 170.4, 神道‖シントウ キーワード (En): 作成者: 井上, 順孝, ウェイマイヤー, アン, マクナリー, マーク, ベンテリー, ジョン・R, マセ, フランソワ, 魯, 成煥, ハーディカ, ヘレン, プロール, インケン, ベルトン, ジャン＝ピエール, 櫻井, 治男, ロコバント, エルンスト, 國學院大學21世紀COEプログラム メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000502

＜発題 5＞

古事記　翻訳に関する回顧

魯　成煥

>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>

【司会】時間がまいりましたので、３番目のセッションに入りたいと思います。報告者は蔚山大学の魯先生ですが、先ほどちょっとおうかがいいたしましたら、蔚山というのは現代（ヒュンダイ）の企業城下町であるそうです。そこは工学とか理科系の技術者を養成する大学だけれども、文科系の、しかも古典などを研究するような学科も現代（ヒュンダイ）がつくったということで、そういう特色のある町から来られた方だということを紹介させていただきます。タイトルは、「古事記　翻訳に関する回顧」ということで、早速お願いいたします。

発題

魯　成煥

こんにちは。韓国からまいりました魯と申します。韓国で、日本文化のことを紹介しながら飯を食っている者です。何年か前から韓国の大学も改革が強まり、大きな改革をしています。カリキュラムで会議をやっていたときに、うちの学長が「例えば魯先生のように、『古事記』を教えないで日本語を教えてくれ」と言いました。もちろん、冗談でありましたが、私も冗談で、「いや、学長、私は赴任して『古事記』を一度も教えたことがありませんよ。危機感を持って日本のことを紹介しながらやっていますよ」という言い訳をしましたが、実は、韓国と日本と神話を比較しながら『古事記』を読んでおりました。

そのとき、私の研究室の隣の人が国文の先生で古典をやっていたし、またその隣が口承文芸をやっている先生でした。彼らが「おまえ、１人で日本の『古事記』とか『日本書紀』を読むんじゃなくて、ちょっと翻訳して我々にも読ませてくれよ」という冗談めいた話をしました。それを聞いて、じゃあ、『古事記』を翻訳して、それから『日本書紀』も翻訳して、どんどん日本の古典を翻訳していこうと思って、『古事記』を細かく読んでみたわけです。そうしたら、もう20年もたっていますが『日本書紀』までいかないですね。『古事記』に未だに留まっています（笑）。

『古事記』翻訳に携わったのはずいぶん前のことですが、今回はそのときをちょっと振り返ってみて幾つかのエピソードを皆さんに紹介したいと思います。日本語で発表するのはいまだに慣れていないので、たまには私の舌がよく回らず、変な日本語が出てくるかもしれませんが、みなさんのご了解をいただきたいと思います。

実は、韓国人は『古事記』にはあまり関心がありません。というのは、１つは日本に関する研究が非常に浅いからです。日本から独立してから日本研究をしたのではなくて、韓国戦争（朝鮮戦争）が終わってから、日本のことを研究してきているわけです。だから、『古事記』の研究はほとんどありません。それと同時に、『古事記』が韓国社会ではよく知られていないもう１つの理由は、『古事記』を出しても売れないから、余計に出版社が出版

することを嫌がっていたという事情があります。

そうしたなかで、幸いにも韓国の古代の歴史研究者が自分の研究に『古事記』、『日本書紀』のことをよく引用して触れています。彼らはかなり年寄りで、日本の植民地教育の経験を持っていますから、彼らは日本語を読むのは別に不便さがないわけです。それで、彼らは『古事記』を自分が日本語で読んでいて、紹介は、例えば引用するときには韓国語で翻訳して引用してくれればいいのですが、漢文をそのまま使ってしまう。そうしたら僕らの世代は、いま私は40代後半ですが、漢字も漢文も読めない、日本語も読めない連中はどうすることもできないわけです。

『古事記』、『日本書紀』が非常に大切な文献であるということはわかっていながらも、読めない状況です。日本語世代の年寄りが頑張ればいいのですが、だんだん年を取って亡くなられていきます。そのかわりに、若手の学者がどんどん舞台に出て来るわけです。すると、『古事記』とか『日本書紀』の翻訳のことが非常に大切になってくるわけです。

要するに、韓国の研究者のなかでは『古事記』が、これは私の個人的な考えですが、2つの点で非常に関心がもたれています。1つは、『古事記』のなかに出てくる神話が韓国の神話とよく似ている。例えば、天孫降臨の話とか三輪山伝説とか、そういうことは韓国の神話と全く同じ構造をもっている。そういうことに対して非常に興味をもっているわけです。

もう1つは、『古事記』に出てくる記事のなかで、韓国に関係のある記事がよく出てくることも関心を持たせる要因です。天孫降臨のときに韓国が見えるとか、それからまた、神功皇后が三韓征伐をやったとか、新羅王子のアメノヒボコ（天日槍）が日本に渡って行ったなど、そういう韓国に関係のある記事がよく出てくることが結構あります。こういう『古事記』に出てくる記事が、自分の歴史、自分の文化のことを研究するのにも、非常に役に立つということが分かってきました。そういう熱望といいますか、『古事記』を読みたいという希望は非常に高まっているのですが、それまで『古事記』が翻訳されていなかった。

そこで私が勇気をもって、じゃあ『古事記』を翻訳しようかということになりました。それで『古事記』を翻訳し始めましたが、大分時間がかかりまして、87年度に巻上を出して、90年に巻中、99年に巻下を出しました。そのとき、日本の研究者は私に会うたびに、「いや、『古事記』を翻訳するなんて大したものですね」と言いました。「大分時間がかかりまして」という挨拶をするたびに私は恐縮していました。実は私は『古事記』の翻訳ばかりをしていたのではなくて、学生も教えながら、私もフォークロアをやっていますので調査をやりながら、仕事をやりながらちょこちょこ『古事記』をやっていたものですから結果的に時間がかかったのです。

きのう、マーク氏が「翻訳は不可能である」と言いました。私も全く同感ですが、翻訳というのは不可能ですが、やらないと先へ進まないのでとにかく翻訳してみようと思ったわけです。翻訳は非常に大切なことなんですね。余談ですが、私は、うちの大学の剣道部顧問になっています。それで、うちの若い子と剣道のお稽古をしたら基本的な練習がどうもおかしい。これはなぜ日本とちょっと違うのかな、どうもおかしいと不思議に思ってい

ました。私なりに解釈すると、翻訳が間違っているのではないか。例えば、「小手！」と言えばいいのですが、韓国の若い子は「手首！」と言うのです（笑）。「面！」とか言えばいいのですが、「頭！」と言うのです。「胴！」と言えばいいのですが「腰！」と言うのです。何が違うのかと思いました。私の先輩たちはどうして「手首」、「頭」、「腰」に翻訳したのだろうかと非常に不思議に思いましたが、そういう間違った翻訳があったから生徒たちも間違って解釈して自分勝手に練習しているわけです。だから、翻訳自体が非常に大切なものであると思うのです。

では、『古事記』を翻訳するときに、いろいろな現代語訳が日本では出版されています。それを読んでいると、だれの説が正しいかよくわからない。ジョン先生（ベンテリー）が歴史言語学の立場から、非常に細かく『日本書紀』を分析して、古代の朝鮮語、琉球語まで勉強していてそれなりに翻訳する。そこまでいくと、私はライフワークになりますので……。では、だれの説を出せばいいのか、だれの読み、だれの注釈をとればいいのか非常に悩みました。そのときに私が相談したところが、青木先生とか西條先生もいらっしゃいますが、古事記学会のメンバーの方々に相談しました。

そうして、いろいろな先生からご教示をいただきました。皆さんは意見が違うかもしれませんが、皇學館大學の西宮一民先生の読みがいいのではないかという気がしました。それともう１つは、翻訳だけで済ませると、結局『古事記』の読者は研究者や大学院生が多いので注釈の作業をやらなければいけない。だから、注釈はどっちをとればいいのか、それで悩みましたら岩波の思想体系から出た『古事記』の注釈を参考にすればいいかなと思いました。非常にずる賢いですが、一番おいしいところを翻訳してみたいと思ったのです。それで、基本的な図書は、読みは西宮一民先生の『古事記』、注釈は岩波の日本思想体系から出た『古事記』。もう２つありますが、私が『古事記』の翻訳に携わっているときに西郷信綱先生の『古事記』が出てきました。それから、随分前に出された倉野憲司先生の『古事記』もありましたので、一応３つを参考にして翻訳することにしました。

つぎに、注釈の問題があります。例えば、私は歴史家でもないし、言語学者でもない。だから、さっきジョン先生の発表のときにも出ましたが、『古事記』のなかに出てくる、韓国と日本人の歴史学には非常に葛藤する部分があるので、勝手に自分の解釈を入れると非常に誤解を招きやすい。それから、私の飯を食うところがなくなるかもしれませんので（笑）、できるだけ私の意見を入れないで、例えば注釈するとき「A氏がこういう説を出した、B氏がこういう説を出した。韓国側から見ればA氏がこういう説を出した」、そういうふうにました。それから、私は比較神話学をやっていますから韓国の民間伝承の中でもよく似ている伝承があります。例えば、因幡の白兎みたいな、そういう口承文芸の伝承は、韓国の口承文芸に出てくれば韓国にもこういうことがあるよという資料も出しました。そういうふうにやっていけば、少しでも韓国なりに役に立つのではないかと思って基礎的な作業を行いました。

それで少し問題になってきたのが、敬語の問題です。昨日から今日までずっとヨーロッパ、アメリカの先生の発表をうかがっていますが、韓国では日本と全く同じように敬語が

ややこしくなっています。それで、敬語式に翻訳をそのままやるのか。そうじゃなくて叙述的に、「である」とかいうふうにやるのか、そういう問題が一番初めに出てきました。そのときに全部敬語を使って翻訳をすると、韓国民の情緒には合わない感じがしました。信頼性がないのではないか、手紙を出しているような気がしましたので、序文だけに敬語を使いました。序文は天皇に捧げるという言葉ですから、序文だけ敬語をきちんと使って翻訳しました。本文は、敬語は一切使っておりません。

そういうことに決めて翻訳しましたが、翻訳するときに、昨日も今日もつくづく思いましたが、韓国は漢字文化圏でよかったなと本当に思っています。同じ漢字文化圏でもあるし、日本語と韓国語は語順がほとんど同じであるので、『古事記』の翻訳はヨーロッパの方々と比べるとスムーズにいきました。もう１つは、そういうふうに翻訳していっても一人では解決できない部分がたくさん出てきています。そういうときに、だれかに聞かなければいけない。日本の研究者に聞くしかないのです。去年亡くなられましたが、松前健先生にそのときにお世話になりました。学期中のときは『古事記』を翻訳しながら注釈をつけ、疑問が生じたときには夏休みや冬休みを利用して松前先生に相談に乗ってもらうなどし、少しずつ解決していったわけです。

ところが、漢字文化圏とその言葉の順番がほとんど同じであるということだけでスムーズにいったのではなくて非常に難しいところもありました。例えば、韓国にない言葉がよく出てきます。たとえば、「榊（さかき）」とか「八咫烏（やたがらす）」とか、「鞆（とも）」とか、「鬘（みずら）」とか、「千木（ちぎ）」とか、「鰐鮫（わにさめ）」とか。「鰐鮫（わにさめ）」はちょっと別の問題ですが、それを注釈すると注釈では物足りない気がしました。それで、絵を描いてみたりした。私はものすごく絵が下手ですが、うちの学生にお願いしていて、「これが鬘（みずら）なんだよ」と描いてもらったりした。それを、出版社のほうに出しました。余談ですが、「鰐鮫（わにさめ）」については、鰐（わに）の説も紹介しましたが、私は鮫（さめ）の説をとりました。

翻訳が完成して出版社を探しましたが、なかなか見つからないわけです。これは経済的な部分があると思います。私は韓国の領事館、日本の領事館に行って「『古事記』を翻訳しているんだけれども、出版補助金をもらうところがないか」と相談してみたら、親切にいろいろなところを紹介してくれた。そのなかの１つに挙げられたサントリー文化財団にお願いしたところ、サントリー文化財団のほうが補助金を出してくれた。原稿料ではなくて出版補助金です。それで、やっと出版社もオーケーしました。１回だけではなくて、巻上から下が出るまで３回にかけてサントリー文化財団から補助金をもらいました。

それで出版にかかわりますが、『古事記』を翻訳して、私も神名とか固有名詞に非常に悩みました。一応、日本読みでやってみました。それから最近韓国は漢字とハングルを混ぜて出版するとその本は絶対売れません（笑）。ハングルになっていないとなかなか読者が買わないので、では人名とか固有名詞はどうするかということです。それは日本語読みでやって、括弧にして括弧の中に漢字を入れる。それで注釈をつけるというふうにしました。

それからまた韓国は、翻訳して原文、漢文を載せないとだれも信用してくれないので、

たとえばこの部分、これは漢字になっていますが（本の左側）、こっちはハングル（右側）、ハングルの翻訳が終わったら漢文がくるようにしました。それからまた注釈は本文の下になっています。そういうふうにしていかないと、韓国の研究者がなかなか信用してくれません。

そういうふうに翻訳しましたけれども、今はコンピュータなどがあって別に問題がないんですが、巻上を出すときにはコンピュータが一般化されていなかった。そうしたら、出版社のほうで印刷する技術者が非常に嫌がるのです。なぜかというと、日本でしか使わない漢字がたまたま出るわけです。あのときはコンピュータが普及していなかったから、一字一字全部活字を集めてやるわけで、韓国ではない漢字も出てくるわけです。そういうときに、『古事記』出版のためにわざわざ活字をつくらなければいけない。そういうことが非常に煩わしい仕事で、出版社に行くたびに非常にブーブーと不満をよく言われたことがあります。

そういうふうに何だかんだ言いながらも、やっと『古事記』を99年に巻下を出して完成しました。私は、韓国の人がどういう反応を見せるか非常に興味がありました。私が今手に持っているのは、巻上・巻下の2冊ですが、ちょっと表紙の色が違います。私は、『古事記』を翻訳して乞食になるのではないかと思っていたのですが、ちょっと売れました（笑）。それは冗談ですが、この『古事記』のタイトルは私の友人が書道をやっているのでちょっと書いてもらいました。その上に、私の意見が全然入らずに、出版社が勝手にサブタイトルをつけたわけです。そのサブタイトルは、「日本最古の歴史書」と書いてあります。「歴史書」なのか「文学作品」なのか、判断しかねますが、出版社は「日本における一番古い歴史書」とサブタイトルをつけて出したほうが売れるのではないかと思ったわけです。

皆さんご存じのように、巻上・中・下がありますが、歴史的な部分だったら巻中、巻下だと思いますが、売れることを考えたら巻上が圧倒的に多いのです。ということは、出版社のほうは売れることを考えて「日本最古の歴史書」というサブタイトルをつけて出したのですが、韓国社会の読者たちは歴史書として見ているのではなくて、神話のテキストとして見ているわけです。非常に文学に近い性格を持っている古典だという意識で、読者たちは買っている。いろいろな反応が出てきまして、韓国社会では非常に有名な崔仁浩（チェ・イノ）という小説家が、『失われた王国』を『朝鮮日報』で随分長く連載したことがあります。彼は小説家だから勝手に大胆に言えるのですが、百済の人が日本に来て非常に大きな貢献をし、新しい国をつくったことを書いています。『失われた王国』という名前で本にもなりましたが（日本語訳は『消えた王国』）、そのときに、私の『古事記』をかなり長く引用しています。それを見ますと、『失われた王国』ですから歴史の部分を引用しているかと思ったら、そうではなくて、巻上の歌のことを長く引用してありました。彼のおかげで、私の『古事記』も少し売れました（笑）。

もう1つの反応は、意外なものでした。ある日、私の研究室に70歳ぐらいのお年寄りが訪ねて来て、全く面識のない方が私に「いやあ、先生、ありがとうございます」と挨拶するわけです。彼の自己紹介を聞くと、日本統治時代に自分のお父さんが独立運動をしたと

か何とか言います。「何が言いたいのですか」と聞いたら、「先生の『古事記』が私には非常に役に立ちました」と言うのです。彼が、実は1,000部以上も『古事記』を買っているのです。感謝すべきは彼ではなくて私のほうでした。彼は釜山の人でしたがわざわざ蔚山の私のところに来て、「先生、食事でもぜひ一緒に」ということで、私も本当に接待を受けました。受けながら、「おじいちゃん、どうして『古事記』が1,000部も必要でしたか」と言ったら、彼は「実は私は天理教信者ですが、天理教の経典に、よくイザナギ（伊邪那岐）・イザナミ（伊邪那美）のことが出てくる」というのです。それは彼の解釈ですが、私にそういうふうに説明しました。イザナギ・イザナミとか、ツクヨミノミコト（月夜見尊）が出てくるのは、天理教を明治政府が弾圧していて、それで妥協することになって天理教の経典のなかに入ってきた。だから、教祖様が教えたそのときに戻りたいという趣旨がありました。それで天理教の教会でおじいちゃんが頑張って、「これだよ」と幾ら強調していてもほとんどが無視される。強調すればするほど一人ぼっちになっていく。そのときに私の『古事記』が出た。それで、やっと先生のおかげで証明ができました。それで、1,000部を私は自費で天理教の信者に配るつもりで買いましたというのです。

全然予想もつかなかったところから反応が出てくることに、私は非常に興味深く感じました。それで、未だに彼とつきあいを維持しています。たまに、「講演に来てくれませんか」と頼まれて２回も行きました。そのときに、「天理教の経典を翻訳するときには何か問題はないのですか」と言ったら、やはり問題があるらしいです。ちょっと話が外れますが、例えば、天理教の経典に出てくる唐（から）の言葉、唐人とか日本という、そういう言葉をそのまま直訳するとえらいことになってしまう。たとえば、「唐人が日本の地に入り込んでままにする」とか。「唐を日本の地にするなり」とか、「唐は日本の地にしてある」とか、「唐の地を日本の地にしたならば」とか、そのまま直訳すると大変なことになってしまう。

それで、「じゃあ、どういうふうに翻訳していますか」と聞きましたら、たとえば、日本だったら教祖様の教えが伝わったところ、唐とかそういう言葉は、これから伝わるところというふうに訳すといいます。唐とか唐人という、そういう言葉は一切使わずに伝わるところ、伝わったところで訳すのです。もう１つは、及んだところ、及ぶところと訳します。韓国語の経典では、そういうふうに翻訳されておりました。天理教も、これは『古事記』の翻訳よりももっと難しいのではないかという気がいたしました。

このように、韓国では天理教の信者さんがよく『古事記』を買ってくれました。反対に、日本の研究者、日本の古典を勉強している学生とか、日本の研究者はあまり買ってくれませんでした（笑）。そのかわりに、韓国文学（国文学）のなかで古典をやっている人が随分買ってくれました。そこから１つ反応が出てくるのは非常におもしろく読んでいますが、やっと『古事記』を出すことによって、日本と韓国の国文学者が双方の神話を比較できるようになりました。私は少しでも役に立ったなと思います。これは非常に肯定的に見ています。

これまで我々の先輩の方々が、主に韓国と日本の神話を比較した場合には同じ構造である。だから、昔、日本の方がよくいったように日鮮同祖論のような、文化の源流は韓国の

ほうから日本に伝わっていったのだという研究が非常に多かった。ところが、『古事記』が出ることによって、皆さんご存じのように創世神話がかなり巻上には出てきています。それは韓国も、国文学や口承文芸をやっている連中が80年代に全国にわたって調査を行いました。では文献神話だけではなくてシャーマンとか、口承文芸に出てくる創世神話をどうすればいいのか。そういう研究を、それなりに構造論とか、韓国の神話を分析しているのですが、そういう韓国のいま民間伝承の中に出てくる創世神話を、東アジアの目から見るとどういうふうに位置づけできるか。そういうことが非常に疑問に、いまの問題になっているわけです。

では、文献神話だけではなくて口承文芸の場合には、一番近い国の創世神話はどうなっているのかというところに興味を持つわけです。そういうときに、私の『古事記』が随分引用されました。そういうときには同じ構造を持っている神話が出てくれば、全然違う神話の内容もたくさん出てくるから、では文化伝播的な研究だけではなくて、構造論的に分析しようではないかとなりました。では、似ていない部分は、どうして似ていないのか。よく似ているならば、どうして似ているのか。そういう意味論的な解釈もこれから加えていかなければ、韓国の神話論というか、韓国の神話を東アジアにおける位置づけはなかなかできないのではないか。そういうことが、いま国文の若手学者のほうからよく出てくるスタイルです。それを見ると、大胆で無謀な翻訳ですが少しでも役に立ったなという感はいたします。

韓国社会では、このシンポジウムで神道はどういうふうに翻訳されているかという発表依頼をいただいたときに、神道文献というのは実は初耳でした。どこからどこまでが神道文献なのか、私は非常に曖昧な概念を持っておりました。ちょっと見ましたら、韓国では『古事記』。まあ『日本書紀』も翻訳されておりますが、それぐらいじゃないかなと思います。それから新宗教、天理教の神道系の日本宗教が韓国社会に入ってくるならば、それを経典として、そういう「ミカグラ」というか、その言葉が翻訳されているぐらいではないかと思います。

新宗教のことはよくわかりませんが、『風土記』は韓国の政府、韓国学術振興財団のほうからも、ぜひ翻訳すべきではないかという意見が出て募集しました。出版補助金やら原稿料やら全部つけていますが、応募者がいたかどうかは確認できていません。多分、応募者がいなかったのではないかと思います。

応募者がないということは、さっき昼食のときにも話が出ましたが、韓国社会では翻訳をすると非常に軽く見られてしまう。だから、論文1つ書くことよりも、翻訳したほうが点数が稼げない。では、つまらない論文でも書いたほうが翻訳するよりもいいのではないか（笑）、そういう認識がかなり一般化されているので、なかなか翻訳まで手を入れていないところです。もし神道関係だけではなくて日本古典を韓国の人に紹介して読んでもらうためには、韓国が翻訳を軽く見ることに対して反省しなければいけない。

もう1つは、大学の出版局、出版社が商業主義で売れることばかりを考えている。売れない本を出そうという発想がなかなか出てこないので、非常に残念だと思います。そのな

かでも、古典を翻訳するときには、もちろんジョン先生のようにものすごく細かく緻密に翻訳することもいいのですが、日本の研究者のほうから積極的な協力をもらえないとなかなかいい翻訳は出ないのではないかという気がいたします。そういう条件がそろえば、これから韓国社会でもどんどんいい翻訳が出るのではないかと思います。

非常につまらない話を長く述べさせていただいて本当に申し訳ないのですが、以上で終わります。（拍手）

質疑応答

【司会】大変ご苦労され、しかも売り上げもよかったということで、韓国に大いなる影響を及ぼした翻訳者の非常に謙虚な説明だったと思います。時間がございますので、質疑応答のなかからさらに議論を展開していければと思います。どうぞどなたか口火を切ってください。

【ウェイマイヤー】韓国語にも敬語があるとおっしゃいました。私が聞きたい質問は、韓国の神話では神様の名前に敬語を入れるのはおかしいのかということです。

【魯】答えになるかどうかはわかりませんが、韓国のシャーマンが持っている、例えば、韓国の文献神話として、『三国遺事』とか『三国史記』がありますが、それを翻訳している文体では一切敬語は使っていません。敬語を使うと、何か「古典」というイメージが出てこない。

もう１つは、例えば韓国のシャーマン。彼らがお祭りをするときに神様を招きます。招くときに歌う歌があります。それが敬語になっているかどうかというと、それも敬語になっておりません。だから、『古事記』を翻訳するときに敬語になってしまうと、これは古典なのかと思われてしまいます。古典らしく翻訳するためには、敬語を使わないほうがいいと思っています。ところが、序文はちょっと違っているから序文は敬語で翻訳しました。

【司会】どうぞ。

【安蘇谷】國學院大學の安蘇谷です。いまのお話の中で、韓国の場合はシャーマンとお祀りする神様が出てきました。私は「神話」という言葉を使いたくないのですが、「神話」というのは英語でも死んだ神様の話なものですから。できるだけ「古伝承」と言います。我々は、昨日も桜井さんからお話がありましたように、『古事記』にしろ『日本書紀』にしろ、そこに出てくる神様はいま現にお祀りされて生きていらっしゃるわけですから。「生きていらっしゃる」という言い方は適当かどうかよくわかりませんが、我々は崇敬して信じているわけですね。

そういう立場の神様と、韓国の場合も『三国遺事』とかそういうところに出てくる神様、私も全く勉強していなくて申し訳ないのですが。そういうところに出てくる神様と、シャーマンたちの神様と何かつながりがあるのかどうか。あるいはまた、シャーマンの人たちに対する信仰というか、そういうものがどの程度なのか。韓国ではよく、昼間はクリスチャン、夜になるとシャーマニズムになる人が多いとかいうことをちらっと聞きました。誤っているかもしれませんが。

つまり、いま生きている神様の実態というか、そういう現象の中に表れている神様、あるいは、『三国遺事』に出てくる説話としての神様とのつながり、その辺りのことをちょっとお聞かせ願いたいと思います。

【魯】残念ながら、『三国遺事』とか『三国史記』の中には神様の話はあまり出てこないの

です。もし出るのでしたら、始祖伝承として出てくるわけで、たまには出てくることもあります。それは聖母の神、女神の話ですが、そういうことはいまだに生きている場合があります。

【安蘇谷】生きている。要するに信仰されているということですか。

【魯】信仰までいくかどうかは自信がありません。実は、いま私が住んでいるところは田舎なのですが、その田舎の村の裏が、『三国遺事』にも出てくる女神の聖地になっています。村人はそういう信仰まではいかないようです。それから、いまお祭りをするかというと祭りは一切やらない。ではいつお祭りをするかというと、雨乞いのときにそれをやります。いまはかなり伝統が断絶しており、農村社会では非常に民間信仰のレベルで神を祀っているというケースはほとんど消えていますが、未だに生きているところは沿岸部の方だと思います。

沿岸の地域へ行くと、神社のような形ではないのですが、小さな祠がたくさんあって、「これはどういう神様ですか」と村人に聞いたら、『三国遺事』とか『三国史記』には出てこない全く関係のない神様が祀られている。私が調べているところは蔚山から東海岸のほうの海辺ですが、あそこの神様は名字も持っています。パクさんとか、キムさんとか、パクじいちゃんとか、キムばあちゃんとか。それは、村を開拓した開拓の神なのかと聞いたら、そういう可能性もあるのですが、パクさんという名字を持っている神様が祀られている村にパクさんがたくさん住んでいるかというと必ずそうでもない。

村の神様をいつお祀りするかというのは村ごとに少し違いますが、シャーマンの祭りをやって、儒教式の祭祀も一緒に行います。もちろん、中心になってくるのはシャーマンですが、そのときのシャーマンは世襲制です。そのシャーマンが、お祀りするときに歌う神謡の中に出てくる神様も、『三国遺事』とか『三国史記』には出てこない全く関係のない神様です。だから、全く違う形の伝承として伝えられていると思います。

【安蘇谷】ありがとうございました。

【司会】檀君とかは出てこないのですか。

【魯】残念ながら、檀君も出てきませんねえ。やはり、恨みを持って死んでいった歴史的な人物が出て来る場合が結構多いのです。菅原道真みたいな、そういう人物は出て来ます。

【司会】どうぞ。

【黒住宗道】黒住教の黒住と申します。いまの先生のお答えを伺いながら、欧米の先生方、先ほどのマセ先生もご苦労なさっておられることをひしひしと感じたところです。神道はどう翻訳されているか、「神」をどういうふうに訳すかというので、先ほども deity とか、divinite とか、dieuy とかいう表現で、それになるべく匹敵する言葉を捜しておられるということでした。

日本の神道でいうところの神と、先生のおっしゃるいまの神様とほとんど同じというふうに理解させていただいてよろしいのでしょうか。それとも、菅原道真のように、神として祀っておりますが、いわゆる霊。では、霊と神がどうかというのは難しいことになるのかもしれませんが。「神」という表現で翻訳をされて、そのまま読者の方々はあまり違和感

がなく神道の伝えるところ、『古事記』の伝えるところの神々が伝わっているのかなというふうに思います。

それから、若手の研究者の方々が先生のご著書を読まれて、比較神話学のような東アジア圏としての一つの神話として、歴史書としてではないのでしょうが、研究していこうというお話がありました。もう少し具体的なところを教えていただきたいと思います。

【魯】さっき安蘇谷先生がおっしゃったように、韓国人の中でも神概念は非常に大雑把というか一言で言えないですよね。そういうところでは、日本と韓国とよく似ているかもしれません。

ところが、私はまだ本格的に調査はやっていないのですが、さっき申し上げましたように天理教の関係者とちょっと親しくなりました。そうすると、ピンと来ないところが1ヵ所ありました。韓国の翻訳で親神のことを翻訳したときに、「シンニム」（신님）といいます。それは直訳です。キリスト教徒はそのまま「シン」（신）です。そういうときに、「様」という意味を持っている「ニム」（님）をつけることはなかった。いままで韓国の人々は「神」を呼んだり指したりするときには「ニム」（님）をつけたことがなかったわけです。それを、天理教が、「神様」と「様」をつけたからピンと来ない。お坊さんのことをいうのかなと思いました。お坊さんはスニム（스님）というから、「シニム。あれ？」と思ってよく聞いたら、「シンニム」（신님）でした。それは天理教なりに非常に悩んでいて、それを区別しようと思っていてつけた直訳だと思います。確かに、それは韓国の人の頭の中ではピンと来ない。

それからまた、カトリック、キリスト教徒の「シン」（신）とまた違う。でも、『古事記』とか『日本書紀』、日本の民間信仰に出てくる神様を「様」という言葉をつけずに「神」のままで翻訳すると、スムーズに韓国の民間信仰の概念でスムーズにいろいろな神様や、土着の信仰の中に出てくる自然の神様のような概念として受け入れられると思います。

もう1つは、比較神話のことですが、国文のいまの動きが30代の若手の研究者から出ています。そういう国文のほうから要求が出てくるのは、『古事記』、『日本書紀』だけではなくて、沖縄の『おもろさうし』とか、またアイヌの方々が持っている神謡とか、そういうところまで採集していこうというものです。比較神話学をやりながらも、中国、韓国、日本の口承文芸まで幅広く調査しています。1つの資料集として出たことがないので、今回、韓国の学術振興財団のほうから韓国、日本、中国、その口承文芸まで入れて一応資料集を出そうということの目標で、プロジェクトがいま通ったところです。それで2年後は、もしかすると資料集が出てくるかもしれません。そうしたら、本格的に比較神話学がもう一歩進んでいくのではないかと思います。

【司会】はい、どうぞ。

【藤本】皇學館大學の神道研究所の藤本と申します。先生のお話で出版に至る経緯などの点で非常にご苦労されたということをお伺いしました。昨日からのいろいろなお話の中でもありましたが、やはり訳の問題でもご苦労なさったのではないかと思います。昨日も「国学」の言葉で、やはり訳語の違いによっていろいろ大きな解釈の違いが出てくるのではな

いかという点がありましたが、先生が韓国語に『古事記』を訳されたときに、やはり訳語の違いで「こういう点で解釈が異なってしまうと大変だ」という具体例が幾つかあればお教えいただきたいと思います。

【魯】あらかじめご理解していただきたいことがあります。韓国の場合は『古事記』とか『日本書紀』とか、『三国遺事』とか歴史的な文献の翻訳をするときには、言語学者が翻訳すると買わないと思います。大体、歴史学者とか古典文学をやっている人でないと信用してくれない部分があると思います。

それはジョン先生から見れば、「本当に韓国人は大雑把で、言語学を無視するか」という不満が出るかもしれませんが、言語学はそういうところには一切携わっておりません。

それで、私の『古事記』を読んで、どういう不満が出てくるのかと待っていますが、いまだに意見や、「私はこういう意見だ」ということはでてきません。しかし、私は非常に励みになりましたが、「あなたの翻訳は注釈が非常に役に立つよ」という人がいました。例えば、日本でも同じだと思いますが、韓国社会では古代史になってしまうと在野の方が非常に頑張っているところがあります。その中でも非常に貴重な説を出している方もいらっしゃいますが、非常に危ないのもあります。ですが、「そうした危険なところはあなたの本では見つからない」と言われます。

それは、古事記学会の先生方に相談して、私の意見は出さずに「A氏はこういう説、B氏はこういう説」と出して、それを非常に効用的に使おうということでしたからでしょう。これは、注釈のやり方としてはよかったという評価は何回も聞いたことがあります。

【司会】はい。

【中井】上智大学の中井です。いまのご質問と関連しますが、先生のご発表の中で、漢字混じりではなくて全部ハングルにしないと売れない。同時に、漢文のほうも反対側のページをハングルにしないと、結局、研究者が納得してくれないというお話でした。もう少しその事情を説明していただきたいと思います。

もう１つは、『古事記』を漢文として読む場合はいろいろな難しい点があるのではないかと思いますが、それについて反響か何かあるのでしょうか。

【魯】実は『古事記』は何回も出版していますが、最初に出したものと、最近出版をやり直したものはちょっと違います。最初に出した本はこういうふうに翻訳していて、それから一般人向きの注釈はこういうふうにやって（本文の後ろに続けて）、岩波思想体系のような形で補注を後ろにやっております。補注は長くやってもいいのですが、ここで（本文の続き）長くやったら読者は読んでくれない可能性があるので、できるだけこっち（本文の続き）は短くやって、漢文を入れたのです。

でも、こういうふうに印刷するやり方もいまは古いです。こういうふうにするのではなくて、いまはこちらに翻訳したら注釈をこの下に入れる。論文の書き方、脚注のような形でやっていく。それで、後で漢文を入れる。ですが、一般の人々は漢文を読まなくても、ここだけ読んでもらったらいいということになっています。私の本が売れないということは、この本文の中に漢文・漢字を入れると、韓国人は「いや、これは難しい」と言って買

わない。もちろん、これは売るつもりで出した本ではないので、サントリーさんから助けてもらったから別に構わないので大胆に入れました。でも、予想どおりに研究者が中心に買ってくれました。まあ、そういう事情があります。

それから、私は実は漢文を自由自在に読める人ではないので、一応、「こういうことが原文としてありますよ」というふうに出しました。そうしたら、韓国の研究者も『古事記』を緻密に読む人がいないのでいまだに不満は出ていません。でも、10年後になったらマセ先生のような方が出て来て、「魯の『古事記』はだめじゃないか」という（笑）。20年後の神道はどういうふうに翻訳されているかというと、私を呼ばずに後輩たちを呼んでいただくと率直な話、「これはだめじゃないか。魯の『古事記』はだめじゃないか」という話が聞けるかもしれません。

【司会】はい。どうぞ。

【井上順孝】井上です。先ほどの敬語のお話に戻したいと思いますが、「シンニム」（신님）はめずらしい型ですか。

【魯】めずらしいですね。

【井上】「ハナニム」（하나님）という表現がありますが、これはまた違う話ですか。

【魯】「ハナニム」（하나님）では神の話にならない。「ハナ」（하나）は1つという意味ですから。

【井上】「ハナニム」（하나님）で、神様みたいな意味も持たせているのですか。

【魯】実は韓国の民間の人々は、「ハナニム」（하나님）は「ハヌニム」（하느님）と少し混沌しているのです。

【井上】分かりました。質問は、敬語というときに「神様」とかそういうような意味での敬語と、先ほどおっしゃったように「召し上がる」という表現を「食べる」に変えるような動詞の敬語がありますね。

【魯】それは、韓国ではあります。

【井上】それを尊敬語にしなかったのでしょうか。

【魯】いや、それは序文は……。

【井上】本文の場合ですが。

【魯】本文はしなかったです。それを、「召し上がる」ということよりも「食べる」という。

【井上】ええ。そうしたやり方に対してですが、例えば、日本人が聖書を訳すときに、「イエスは言った」というふうに書く場合もあり得るし、「イエス様はおっしゃった」というようなこともあり得ると思います。これは結局、原典が神に対して、あるいはそこで登場する人に対してどのような態度をとっているかということにかかわるわけですね。

韓国では、神の行動に対して敬語を使うと何かおかしいという話ですが、原典がもし敬語を使うことによって成り立っているものであるとすると、たとえ韓国ではおかしくても、つまり、その原典を書いた人たちの立場を失わせることもあるのではないか。ここは、非常に難しい問題だと思います。

当然、神様の行動とかに関しては、書かれている場合と、口で言う場合ももちろん違い

ますので。例えば、「稲荷」という場合と、「お稲荷様」という場合のように文字と口でも違います。そういうシチュエーションの違いによって表現が違うのは、ひとつの文化の中でもあるわけですが、韓国で書かれているものをそういうふうにするとどうしてもそぐわないということになるのか。そして、そのことによって日本の元の意味が通じないことをどう考えますか。

【魯】分かりました。井上先生に答える前に、申し訳ないのですがハングルにかえて、「ニム」(님)というのは「様」です。これをこういうふうに、「シンニムガ」(신님가、神様が)という言葉を使う場合もあります。そうではなくて、「様」という意味ではなくて、言語学的には何といいますかね。非常に尊敬の言葉で使う、例えば、「ガ」(가)のかわりに「ゲソ」(께서)と言う。そうしたら、非常に尊敬する語になるのです。例えば、ほかの神様のことを、「神様が見られた」とか「行かれた」とか、そういうときには「シンゲソ」(신께서、神様が)とか、それが非常に韓国の中では慣れているのではないかと思います。

ところが、天理教の方がいらっしゃるかどうかわかりませんが、なぜかわからないのですが、天理教は「シンニムガ」(신님가、神様が)になっているのです。だから、これとこれは……、もちろん天理教の方は区別するためにやったわけです。

例えば、井上先生がさっきおっしゃったように、キリスト教徒が「ハヌニム」(하느님)と言った場合には、これはちょっと別になりますが、確かに「ゲソ」(께서)という尊敬の言葉がついていると思います。

もう1つは、私が実はあまり言いたくないことを井上先生が非常に指摘しているような感じがいたしますが。『古事記』を翻訳するときに、宗教の神道の概念で翻訳するのか、あるいは、『三国遺事』、『三国史記』のような歴史文献として翻訳されるかによって、かなり翻訳の敬語の問題がかかわってくると思います。

例えば、神道の教典としての1つとして翻訳するならば、先生がおっしゃったとおりにきちんと敬語をつけてやっても構わないと思います。それは、バイブルはそういうふうになっています。例えば、敬語をきちんと「イエス様が」となっていますが、歴史文献という概念が非常に強い社会でそういうふうに翻訳するとちょっとおかしくなっていく。それで、本当に申し訳ないのですが、神道の教典として『古事記』を取り扱うのではなくて、『三国遺事』、『三国史記』みたいな『古事記』の古典として取り上げたらどうかということでやりました。その点で誤解がございましたら、ご理解をお願いしたいと思います。

【司会】あと5分ほどございます。はい、どうぞ。

【桜井】桜井です。どちらの立場云々ではなくて、例えば『古事記』などの場合、敬語に関連しては、あの中にみずからの行動とかをしゃべる場合、自敬表現というものがあると思います。自分自身を敬語的に表現する。そういう場合、文献の正確さという点を歴史的に使おうとした場合に、そういう違いはいまの話にあったような神道文献や歴史文献を超えた正確さが必要になってこないか。そういう問題が発生しないかなと思ったんですが、いかがでしょう。

【魯】確かに先生がおっしゃるとおりだと思いますが、残念ながら、そこまでは翻訳すべ

きだと気がつかなかったことを告白しておきます。

【司会】はい、どうぞ。

【山中】筑波大学の山中です。いまの議論は非常におもしろい議論だと思っていて、その意味の確認です。先ほど黒住先生もおっしゃっていたように、この議論の中で自国の文化の神概念を翻訳するときに、どうしても自国の文化の神概念が翻訳の中に投影されていく。それを翻訳のときにどう考えるかということ。例えば、ヨーロッパの文化圏の中で神という問題を訳す場合に、日本語をフランス語や英語に訳す場合に、それをどういうふうにするかという問題が、非常に大きな問題としてあるのだということが一貫して問題視されていると思います。

その問題を先生の場合は、先ほどのお答えだと、韓国語は比較的、日本と同じように神概念そのものはルーズであるというか、割とそういうことをきちんと詰めなくてもある程度やれるというようなということだったと思います。ただ、逆に敬語処理の問題に関して言えば、韓国で宗教ということを考える場合には、どちらかと言うと、敬語を使わないでやったほうがむしろうまくいくというような、そういうことで一応考えたということをおっしゃっていたと思います。

ですから、そういうふうに考えると、一方で歴史文献として理解したいというようなことと、もう１つ、しかしながら宗教的な問題をそこにどうしても加味しなければいけないということがある。その辺で恐らく、西洋の先生方のご苦労とまた違ったご苦労がそこにあったろうという意味で非常におもしろく聞かせていただきました。これは別に質問というわけではなくて、コメントです。

私が質問したかったのは、雑駁で申し訳ありませんが、韓国の場合は日本との関係ということがありますので、日本研究等が相当制約された状況があって、その中で随分それが変わってきているということを伺っています。その場合、特に日本の神道にかかわる神話研究等について、いまの韓国の現状ですね。すごく盛んになっているとか、あるいは比較神話学の話も出ていましたので、私個人的には「東アジア」が今後の展開でも非常に重要だと思っているので、韓国のその辺の、非常に大きな意味での日本研究、特に古典の神話にかかわる研究状況がどうなっているのかということをお聞きしたかったのです。

もう１つだけ、つまらない質問ですが、先ほど『失われた王国』というのが非常に流行って、そのおかげで『古事記』が売れましたとおっしゃっていました。その小説家が自分で勝手に創作されたわけで、百済の方が王国をつくったというようなストーリーらしいですが。何で売れたのかなというのがちょっと知りたい……。

【魯】さすが山中先生だと思います。先に、２番目の質問から答えたいと思います。それは、かなりナショナリズムにかかわってくると思います。彼が最近出した本は『カイジン』という小説で、京都にある新羅明神とか、そういう神様が韓国の神様である、あるいは韓国の人物であると書いています。それは日本、韓国、中国までいって、新羅人の活躍を非常に膨大に小説化したものです。それは、韓国のナショナリズムにかかわってきます。それともう１つ活躍しているのは、マスコミ。彼は非常にマスコミを利用するのがうまいの

で、そういう傾向と無関係ではないと思います。

もう１つは、韓国における日本神話の研究の状況は、かなり最近神話がブームです。神話のブームは、去年から出てきました。それ以前、ある有名な翻訳している小説家がギリシャ、ローマ神話を一般人向きに自分の著書を出して、それが非常にブームになりました。それがやっと日本神話のほうにもきている。日本神話に関する研究も積み重ねて単行本も出ていますが、単行本だけでも４冊出ています。１つは年寄りの方が出していますが、２冊は私が出しています。また国文のほうから、私は日本のことを売りながら生活をしているものですから出すのは当たり前だと思いますが（笑）。全然関係のない、国文のほうから１冊が出ました。

この国文の方の説は、文化伝播論的な、大林太良先生の影響を強く受けているように感じられます。とにかく、国文の学者の中でも１冊本を出すぐらいです。もう１つは、若手研究者の方から創世神話の比較をしている人が２～３人出て来ました。その日本関係の研究者の中で日本神話をやっている人は、30名ぐらいいます。それから、幸いに古事記研究会も成り立っています。その会員数はいまだに 15 名を超えていませんが。とにかく１年に１回ぐらいは研究発表会をやろうという、そういう動きがあります。

でも、非常に肯定的に見ているのは、昔は日本に関してコンプレックスを持っていて、何でもかんでも古代の日本文化の原因は韓国だというふうに単純明快な説が多かったのですが、いまはそういうところから脱皮しようという動きが若手の研究者の側から見えてきています。それは、非常に肯定的に見てもいいのではないかと思っています。これで終了にさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。（拍手）